

琉球大学学術リポジトリ

大学共通教育外国語科目において学生のモチベーションをどう刺激するか？
ープロフェッサー・オブ・ザ・イヤーを受賞してー

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学大学グローバル教育支援機構 公開日: 2022-05-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金藤, 多美子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002017937

大学共通教育外国語科目において学生のモチベーションを どう刺激するか？ —プロフェッサー・オブ・ザ・イヤーを受賞して—

金藤 多美子
琉球大学国際地域創造学部

1 はじめに

この度は、自分自身が本学赴任1年目に非常に楽しく取り組んだ授業（2019年度後期開講「英語プレゼンテーション演習中級」）に対してこのような賞をいただき、大変光栄に思うとともに、当該授業が私の記憶の中であらためて特別な授業となりました。「あらためて」と書いたのは、第1週目から毎週実に幸せな気持ちで授業をしていたからです。筆者前期開講「大学英語」授業を受講していた学生複数名が同年度後期の本授業を受講し、また、当該学生が友人に声をかけ「〇〇さんに誘われて先生の授業を選びました」という学生もいました。1年次前期必修科目「大学英語」でたまたま出会った学生たちが今度は自ら本授業を受講してくれたことに関して、「こんなに教師冥利に尽きることはない」と第1週目に感謝の気持ちを述べたところから授業はスタートしました。以降、まるで週に一度担任をしている学生たちに会うような気持ちで教室に向かい、28名の受講生も、週を追うごとに、個人としてだけでなく「クラス」としても成長していく様子が伺えました。元中学校教師としての視点から言えば、英語の授業をしているというよりも、英語授業を通して学級経営にも取り組ませてもらったような15週間でした。10週目を過ぎたあたりから、学生の振り返りに「名残惜しい」という旨のコメントが目につくようになり（私も全く同感でした）、最終週まで幸せな15週間でした。以下、本授業を学生のコメントを交えながら振り返り、大学共通教育外国語科目において学生のモチベーションをどう刺激するかについて、私見を述べさせていただきます。尚、振り返りカード（毎授業後）や自己評価用紙（講義最終週）に学生が記述した内容を、今後の研究活動等の目的で匿名で使用させてもらうことについては、当該学生たちからも同意を得ていることを申し添えます。

2 本授業内容に関して

まず、本授業の構成は、私自身が他大学修士課程在籍時に受講していた授業の構成を参考にしており、元々はToastermasters International¹の例会形式が土台となっています。以下は1コマの授業の流れで、文中の様々な役割（Leader of the Meeting / Table Topic Master / Timekeeper / Formal Speaker等）は学生が順番に務めます。3-5がメインの授業活動となります。

1. **Introduction** : 本時の目標の確認
2. **Vocabulary check** : 毎週 (学生自身が選んだ) 10単語を覚えてくることになっているので、ペアで相互チェック。英→日/日→英 / 当該単語を含む例文、の順でチェック。
 < * ↓3と4は**Leader of the Meeting**が進行を担当し、**Timekeeper**が計時を担当。 >
3. **Table Topic Session** : 即興スピーチセッション。**Table Topic Master**が事前に考えてきたトピックを各グループ (3人グループ) に与える。3分の準備時間を経て各グループで1人ずつ交代に1分30秒の即興スピーチをする。→各グループ代表1名 (**Table Topic Speaker Rep**) が全員の前でスピーチをする。
4. **Formal Speech Session** : フォーマル・スピーチ・セッション。**Formal Speaker**は授業までに3分間のスピーチを準備し練習した上で授業に臨む。終了後、各スピーチごとに**Evaluator**が1分30秒以内でコメントをする。
5. **Feedback Session** : ここで教員から一人一人のパフォーマンスへのコメント。
6. **Project** : **York St John University** (英国) 日本語学科学生との非同期型協働学習に関する活動。活動自体は授業外で学生主体で実施し、授業では相談・進捗状況の確認等を主に行う。実施した非同期型協働学習は以下の通り :
 - (1). 日/英の学生がペアを組み**OneDrive**上の共有フォルダで自己紹介エッセイをシェア。
 - (2). **Project 1** : 4人グループで沖縄をテーマに英語で動画を作成→**York St John University**でのイベント(“**Japan Experience Showcase**” 2019年11月12日)で上映。
 - (3). **Project 2** : 新しい4人グループで“**Campus Life in Japan**”をテーマに英語で動画を作成→**York St John University** 学生が日本留学前に参考資料とする。
 *2つの**Project**に関しては、**COIL**型授業として世界展開力事業 (グローバル教育支援機構開発室) のスタッフの方々にお世話になりました。
7. **Closing** : 課題の確認と本時の振り返り。学生は振り返りカードを記入後、単語カードとともに教員の点検を受けて退室。

授業を構成する上で心がけたことは以下の通りです。

- 上記の通り、毎時間、学生全員に何らかの役割があること (少なくとも3の即興セッションで全員が**Table Topic Speaker**として即興スピーチをすることが求められる)
- 毎回座席を変えることでペア・グループのメンバーを毎時間変えたり、授業外でグループ活動に取り組みさせることで、学生同士がお互いについてよりよく知り仲良くなる機会を提供すること
- 教員は学生にとってノンネイティブスピーカーのモデルであり、彼らの学びのサポーターであり、「教えない」こと

以上の取り組みを通して、「教えない」授業がどのように学生たちの学びにつながったのかについて考察していきたいと思います。

3 「教えない」授業でどう「学んだ」のか

ここでは、本授業をJ. M. Kellerが提唱したARCSモデルを成す学習意欲に関連する4つの概念（鈴木監訳 2018:47-57）に基づき、本授業がどのように学生たちの学びにつながったのかを彼らの振り返りを通して見ていきたいと思えます。

①Attention（注意）：「それぞれの人のストーリーを知るのは非常に興味深い。」「新しいことを知るのは大変面白い。」「どのスピーチも面白いし聞きやすく、そして何よりとても刺激になります。」（学生の記述より抜粋。以下同様。）⇒全員が取り組む即興スピーチのテーマが毎時間グループ毎に違うことに加えて、フォーマル・スピーチのトピックも各学生が選んだので、それぞれの関心や専門分野を反映した興味深いスピーチを毎時間堪能できました。例として、「Social Issues: Kinoko-Takenoko War（お菓子「たけのこの里」と「きのこの山」の簡易的測定による社会的論争問題へのアプローチ）」（理学部学生）や、納得のいく手作りカレーにたどり着くまでのスパイス調合の全行程（工学部学生）などがありました。また、お互いが刺激し合うことでフォーマル・スピーチのクオリティが上がっていった、という記述も見受けられました。

②Relevance（関連性）：「自分の好きなtopicを話すことができたので結構楽しかったです。」「わからなかった単語をすぐ単語カードに記入し復習することで、自分自身の英語の単語力がとても向上しました。」（プロジェクトでは）チームメンバーとともに活動することで、人脈も大きく広げられて、とても充実していました。」⇒フォーマル・スピーチのトピックは各自が選んだので、自ずと学生が関心のあることについて話すことになり、学生自身の生活経験と題材がつながりました。これに関しては、「自分のことを話すときと、他人のことを話すときでは、脳の活動が異なる」という研究を踏まえ、「（インプット＝アウトプット練習は）『自分のこと』を話せるようにするのが最も効果的」（白井 2020:9）とする知見にも合うかと思えます。次に、「やりやすい方法でやれるように選択の幅を設ける」（鈴木監修 2020:14）ことを念頭に単語カード活用方法も学生に任せたこと、さらに、グループ活動が楽しいことに加えて、自分たちが作成した動画が英国人学生の役に立つ→「やる値打ちがありそうだ」（鈴木監修 2020:14）と学習活動のメリットを学生が認識していたことも大切であったと思えます。

③Confidence（自信）：「簡単な自分が知っている単語を使ってちゃんと文で話すことができたのが嬉しかったし、皆が反応もちゃんとしてくれたので話していて楽しかった。」「英語の上手下手より、伝えたいと思うことが大切だと思ったし、みんな『うんうん』と聞いてくれたことが心の支えになった。勇気が大切だと思った。」「色々な方のスピーチを聞きましたが、前を向いて目でアイコンタクトを取ると非常に内容が入ってきたように感じました。次回の参考にしたい。」⇒上の記述内容の下線部は、私が授業のIntroductionで本時の目標として掲げたものの一部です。このように、本時の目標を「頑張ればできそうなもの」に決め（鈴木監修 2020:225）たことに加えて、何度も人前で話す機会を与えることで「他人との比較ではなく、過去の自分との比較で進歩を認める」ことができたこと、さらに、毎時間クラスメートのパフォーマンスを見て「うまくいった仲間のやり方を参考にして、自分のやり方を点検する」（鈴木監修 2020:225）機会がふんだんにあったことも、「学習者自身が学習状況をコントロール

できる」（鈴木監修 2020:16）状態を生み、結果として彼らの自信につながったかと思われます。

④Satisfaction（満足感）：「フォーマル・スピーチはとても緊張しましたがやり切ることができました。しかもEvaluatorの方にほめられたのでとても嬉しかったです。疲れも吹き飛びました。」⇒ARCSモデルのSatisfaction面は、「ほめて認める」ことの他に「ムダに終わらせない（一度身につけたことを使うチャンスを与える）」、「裏切らない（テストの整合性等）」（鈴木監修 2020:223）ことも含みますが、本授業で最も有効であったのは、自分のパフォーマンスに対して必ず教員とクラスメートから肯定的なフィードバックが与えられたことにあったと思います。上記の授業の流れ5の場面は、彼らのパフォーマンスのどこが素晴らしく、どこが前回と比べて向上したのかを、私が一人一人の顔を見ながら英語で述べている間、他の学生が姿勢を正してニコニコしながらクラスメートが先生にほめられているのを嬉しそうに聞いているという、至福の時間でした。また、退室前の単語カード点検時に目を見て一言でも話しかけることで、全体の前でパフォーマンスをする機会がなかった学生も本時において彼らの「居場所」がきちんとあったことを感じられるよう心がけました。

4 終わりに

「教えなかった」のにいつの間にか「学び合っていた」、そしてこちらも「教わっていた」本授業を振り返りながら本稿を書くのも、また至福の時間でした。この機会を与えてくださったことに感謝いたします。今年度後期の当該授業でどのような出会いがあるのか、今からワクワクしています。今後も学生のモチベーションを刺激し続ける英語教師でありたいというのが私の目標とするところです。最後まで読んでくださりどうもありがとうございました。

注

ⁱToastmasters International <https://www.toastmasters.org>

参考文献

白井恭弘監修『新装版耳からマスター！しゃべる英文法』コスモピア、2020年。
鈴木克明監修『インストラクショナルデザインの道具箱101』北大路書房、2020年。
J.M. ケラー著 鈴木克明監訳『学習意欲をデザインするーARCSモデルによるインストラクショナルデザインー』北大路書房、2018年。